

名蜂  
稱

て祈らまし、そのかみ熊野に人多く参りしかば、かゝることわざあり、古きこと、見えて、家長日記、元久三年京極殿うせ給ひ攝政殿夢のやうにて、上下北面の人々馬車にて、はせちがふさまありといふむしのもの参りとかやするにこそよう似て侍りしか、是には唯もの参りとあれど、熊野参なるべし、中略、蟻はむれをなして、他のむれに入らず、僅ばかり隔てし處の蟻もむれことなるをば、必くひ殺すものなり、戯に砂糖などの甘みある物を、紙などの上に載せ、蟻のとほる處に置ば、須臾の間に多く集る、それを取て、他所の蟻の群たる中に入るれば、くひあふに、主客のきほひことなれば、他より入る蟻は敗走す、かくして鬪はしめざれども、もとより集りて戦ふものなり、中略

蟻の塔をくむ事、五雜俎、人有掘地得蟻城者、街市屋宇樓堞門巷、井然有條、唐五行志、開成元年、京城有蟻聚、長五六十步、濶五尺、至一丈、厚五寸至一尺、可謂異矣、蜂亦有之、おもふに蟻の塔そのまゝにして置かば、次年も又蟻集るものならむ

〔新撰字鏡〕虫 蠶 蜂 二作正凶 反、波、知、 〔同〕虫 蟻 時綱反、丘、蜎也、一名蜜壇、波、知、乃古、

〔倭名類聚抄〕十九 蜂 說文云、蜂、蠶、和名波、知、螿、人虫也、四聲字苑云、蠶、音、范、蜂子也、

〔箋注倭名類聚抄〕八 名 新撰字鏡、蠶同訓、原書、蝮部云、蠶、飛蟲、螿、人者、虫部云、蠶、毒蟲也、按玉篇云、蠶亦作蜂、又玉篇、廣韻、蠶皆作蠶、源君引並從、今字、原書、蠶、不連、注亦不同、此所引有誤、玉篇云、蠶、蜂也、廣韻同、禮記、檀弓及內則注亦云、范、蜂也、未見訓、蜂子者、不知四聲字苑何據、按說文無蠶字、依禮記注、則知古唯用范字也、

〔類聚名義抄〕十 蜂 蠶 ハチ 蠶 正 蜂 通 蠶 ハチ

〔日本釋名〕中 蜂 ハチ はりさし也、玄とちと通ず、

〔東雅〕二 蜂 ハチ 素戔嗚神、大己貴神を蜂室に寢しめられしといふ事は、前に見えし如く、又饒